



大学図書館問題研究会京都ワンディセミナーのご案内

「大学図書館と著作権」(山本 順一氏)

大学図書館内に「著作権の範囲内でご利用ください」という貼り紙を掲げ、利用者に著作権の遵守の説明をしているはずなのに、利用者が理解してくれないことってありませんか？しかしその一方で、図書館員が自ら著作物を利用しようとした際に、著作権について知っているが故に、自分の都合がよいように著作権を解釈しているなんてことはないでしょうか？

今回のワンディセミナーでは、大学図書館と著作権の昨今の動向を中心に、われわれ図書館員が知っておくべき著作権の内容についてご講演いただく予定です。初心にもどって著作権のことを考えてみませんか？

皆さまのご参加をお待ちしています。

講 師：山本順一先生（桃山学院大学）

日 時：2008年5月24日（土）14:00～16:40（13:45～受付開始）

場 所：国際交流会館 第一会議室（TEL:075-252-3010）

京都市左京区栗田口鳥居町2番地の1（市営地下鉄蹴上駅から徒歩6分）

アクセス：<http://www.kcif.or.jp/jp/access/>

主 催：大学図書館問題研究会 京都支部

参加費：大図研会員は無料 / 非会員は500円（参加費は当日、会場でいただきます）

タイムテーブル：14:00～14:10 開会のあいさつ（10分）

14:10～15:40 ご講演（90分）

15:40～15:50 休憩（10分）

15:50～16:40 質疑応答・意見交換（50分）

*終了後、懇親会を予定しております。

※申込方法については、次ページをご覧ください。

[目 次]

大図研京都ワンディセミナーのご案内	...	1
関西4支部新春合同例会『猫の司書さん』を創った！～高校生が語る図書館システム～	...	2
参加報告①～④		

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール：dtkk@rg7.so-net.ne.jp（大学図書館問題研究会京都支部）

URL：<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

◆ ワンディセミナー「大学図書館と著作権」(5月24日開催) 申込方法 ◆

当日参加も可能ですが、できましたら5月22日(木)までに、次のいずれかの方法でお申込ください。

- ・大図研京都ワンディセミナー申込フォームで申し込む。
<http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>
- ・支部委員会(dtkk@rg7.so-net.ne.jp)宛に(1)お名前、(2)ご所属、(3)大図研の会員であるか否か、(4)懇親会に参加するか否か、(5)E-mailを知らせる。
- ・支部委員 呑海沙織(京都大学医学図書館)(FAX: 075-753-4330)宛に(1)お名前、(2)ご所属、(3)大図研の会員であるか否か、(4)懇親会に参加するか否かを知らせる。

ご不明な点などございましたら、京都支部 支部委員会(dtkk@rg7.so-net.ne.jp)までお問い合わせください。

関西4支部新春合同例会

『猫の司書さん』を創った! ~高校生が語る図書館システム~ 参加報告

2月2日におこなわれた関西4支部新春合同例会は、全国から多数の参加をいただき盛会のうちに終了しました。参加者数や当日の活発な質疑等からも、図書館員の「猫の司書さん」に対する関心の高さが感じられる会となりました。今回は、参加報告を4名の方にお寄せ頂きました。

参加報告① 日置 将之

はじめに

2007年2月2日、岐阜県立東濃実業高校(以下、「東濃高校」と記す)の先生とコンピュータ部の生徒3名を招いて、標記テーマの例会が行われた。東濃高校は、平成19年度「第28回U20プログラミング・コンテスト」で最優秀賞を受賞し、話題となっていた学校である。受賞作品は図書館管理Webシステム「猫の司書さん」で、可愛らしい猫がアニメーションで動く優れたデザイン性と、豊富な実用的機能を兼ね備えたシステムである。今回の例会では、指導教諭の久保利光先生に受賞までの経過を、部員の秋山貴俊さん、小栗しほさん、加納愛実さんにシステムの概要や課題などをお話しいただいた。

本稿では、今回の例会で先生や生徒さんたちが話された事柄について、出席されなかった方にも内容が伝わるよう、詳細に報告する。

1. 東濃高校コンピュータ部について

東濃高校のコンピュータ部では、以下の3点を活動の柱としていると述べられていた。

①国家資格の取得

→情報処理の基礎力を養うため、基本情報技術者試験やソフトウェア開発技術者試験等の合格を目指している。(秋山さんは、難関とされるソフトウェア開発技術者試験に合格している)

②競技大会への出場

→ペーパーテスト等によってコンピュータ関連の知識・技術を競う大会で、コンピュータ部は平成19年度の岐阜県代表になっている。

③システムを創る

→実際のシステム作成にも力を入れており、今回初めて「プログラミング・コンテスト」に参加したのは、その成果を発表するためでもあった。

2. 「U20 プログラミング・コンテスト」について

このコンテストは、情報化月間推進会議（経済産業省、文部科学省、内閣府、総務省、財務省、国土交通省で構成）が主催しているもので、20歳以下の日本居住者なら誰でも参加できるコンテストである。久保先生によれば、高校生よりも専門学校や高等専門学校の学生による参加が多く、高校生が参加できるプログラミング・コンテストとしては最高峰とのことである。

3. 受賞までの経過

今回の例会は、久保先生による受賞までの経過説明から始まった。久保先生は、受賞に至るまでの生徒らの動きを、ユーモアも交えて分かりやすく説明して下さった。

経過を時系列でまとめると以下の通りである。

2007年3月中旬～

システム作成に着手、起案書を作成

→最初の起案書はヒドイ内容だった。このため、学校図書館に行って業務内容を調査することになった。（職員に対するヒアリングを実施）

調査に基づき再度起案書を作成、設計書の作成にも着手した

→先生は内容をチェックするが、間違っていることは指摘しても、どこが間違っているかまでは教えなかった。

4月中旬～

プログラミングに着手

→先生は作業工程のチェックはするが、具体的なアドバイスはしなかった。

7月30日23時20分頃

システム完成

→コンテストの締め切りは31日だったため、ギリギリだった。

7月31日

名古屋から新幹線便で作品を発送

9月1日

最終選考に残ったため、東京でプレゼンテーションを実施

→生徒たちは最優秀賞に選ばれた時よりも、最終選考に残った時のほうが喜んでいたのである。

9月14日

最優秀賞を受賞

4. 「猫の司書さん」の詳細

システムの説明は、小栗さんと加納さんが交代で行っていた。説明にはパワーポイントを利用し、システムの画面も表示された。

4. 1 利用者に対する機能

・ユーザーインターフェース

→利用者の立場に立って考え、分かりやすい画面や動きのあるナビゲーションを心掛けた。

・検索機能

→書名や著者名から検索できる。レビュー機能により、他の利用者が書いた資料に対するコメントを見ることが出来る。

・貸出ランキング

→クラス別ランキングや月間・年間のランキングを表示できる。リアルタイムで更新するため、

いつでも最新のランキングが確認できる。

- ・イベント情報
 - 図書館主催のイベントや学内行事の案内を見ることができる。
- ・利用者専用ページ
 - 貸出や予約の状況を確認することができる。また、資料に対するコメントを書くこともできる。
- ・メルマガ機能
 - 新刊やイベントの情報を掲載したメルマガを受信することができる。新刊の情報は、興味のある分野に限定することも可能。
- ・購入希望・要望のページ
 - 要望等は管理者に直接伝わる。要望に対する回答は一覧で表示される。

4. 2 管理者に対する機能

- ・ユーザーインターフェース
 - 長時間の作業にも目が疲れないよう、緑を基調とした配色にしている。
- ・通常業務（貸出・返却等）
 - 任意の貸出期間や貸出冊数を設定することができる。貸出禁止資料の設定も可能。
- ・新刊登録
 - 図書番号は自動付与のため、同一番号の付与は起こらない。
- ・予約管理
 - メールでの再度通知や、取消、順番の変更が可能。
- ・図書館情報
 - イベント、おすすめ情報の提供や、利用者情報の管理（一覧作成、クラス替え、卒業処理等）ができる。
- ・その他
 - クラス数やクラス名の設定、休日設定、蔵点関連機能などがある。

4. 3 課題

- ・3学年制の学校にしか対応していないため、小学校や中高一貫校等には利用できない。
- ・各種 MARC に対応していないため、書誌情報等は手入力する必要がある。

5. 質疑応答

質問には、主に秋山さんが答えていた。秋山さんが返答に窮した際には、久保先生がサポートに入ることもあった。

5. 1 主な質疑

- ・システムで扱える蔵書冊数に上限はあるか？
 - システム上の上限はないため、サーバーのスペックに左右される。テストデータは2万件だった。
- ・雑誌を扱うための機能はあるか？
 - 特に設けていない。今後対応したい。
- ・このシステムが稼働している図書館はあるか？
 - 現在このシステムを利用している図書館はない。今後の予定もない。
- ・レファレンスに関する機能はあるか？
 - 特に設けてはいない。要望のページを利用してもらうしかない。
- ・完成前に、司書による試用はあったのか？
 - 作成で手一杯だったため、そこまで気がまわらなかった。
- ・物品管理システムに対応しているか？
 - していない。

- ・メルマガで設定できる興味のある分野の特定には、何を利用しているのか？
→分類番号の1桁目を利用している。
- ・プログラムに使用した言語は？
→言語はPHP、DB管理システムはMySQL。かかった費用は実質0円だった。
- ・グループ内の役割はどうなっていたのか？
→秋山が中心となり、グラフィック担当の加納以外は全てプログラミングにあたった。意見交換はあまりできなかったが、グラフィックの色彩については話し合った。
- ・レビュー機能には必ず実名が表示されるのか？
→表示されてしまう。(匿名機能を付けて欲しいとの要望が出た)
- ・図書館をどれくらい利用しているか？
→秋山：普段は月1回程度。
加納：忙しくない時はほぼ毎日。
小栗：忙しくない時は、昼休みに良く行く。
- ・今日発表した感想は？
→秋山：図書館の人は目の付け所が違うと思った。今後は今日の意見を反映していきたい。
加納：とても緊張した。
小栗：厳しい意見を受けて、作り直してやりたいと思った。

5. 2. 厳しい意見

久保先生からは、生徒たちが褒められすぎているため、厳しい意見も言ってやって欲しいとの要望があった。その影響もあってか、一部の参加者からは「図書館システムとしてはとても使えない」という意見も出ていた。具体的には、TRCマーク等に対応していない点、物品管理システムと連動していない点等から、資料の受入・登録にかかる作業が極めて煩雑になり、実用的ではないとの意見だった。

しかし、この意見は大学図書館と学校図書館との規模の違いを見落とした意見だったように思われる。確かに、大学図書館を前提とすれば、マーク等に対応していない点は致命的であろう。しかし学校図書館(高校)の場合、平均図書購入費は年間93.7万円である(「学校図書館」2007年11月p.44)。これを月平均にすると約7.8万円となり、せいぜい60冊程度しか購入できない金額である。このことから、小規模な学校図書館ならば手入力でも十分であると考えられる。初期のデータ登録にはそれなりの労力が必要になるかも知れないが、それさえクリアすれば、猫の司書さんは十分に「使える」システムであると思われる。

5. 3 なぜ「猫」なのか

参加者の中から、なぜ「猫」なのかという質問も出た。その理由には、部員全員が猫好であった点や、図書館の業務を調べるうちにその忙しさが分かり、まさに「猫の手も借りただろう」と思った点などがあげられていた。

これに対し、懇親会の中では「私は犬派である」と表明する参加者もあり、「どこかのボタンをクリックしたら、猫が犬に変わるような工夫をしたら？」といった意見も出ていた。

所感

今回の例会には50名近くの方が参加しており、かなりの盛況だった。質問もひっきりなしにあり、時間切れのため途中で打ち切ったほどである。

例会の流れは、先生による経過説明、生徒らによるシステムのプレゼン、質疑応答といったものであった。先生はさすがに現職の教諭であるだけあって、話しが上手で分かりやすかった。生徒らによる発表は新鮮だった。これまで、高校生による発表を生で聞く機会がほとんどなかったため、言葉に詰まりながら話す彼らの姿が非常に初々しく、ほほえましく感じられた。

残念に思ったのは、学校図書館の現場ではまだこのシステムが稼動しておらず、今後も稼働の予定がないことである。このシステムに最も適しているはずの東濃高校でも、県費で購入した図書館システムを利用しているため容易には導入できないとのことであった。この種のシステムは、実

際に使ってみないと本当の良し悪しは分からない。また、使っていくことで問題点が見つかり、徐々に改善されていくものである。せつかくの力作を無駄にしないためにも、是非どこかの学校で導入していただきたいものである。

ひおき まさゆき (大阪府立中央図書館)

参加報告② 山本 奈美

このたび『猫の司書さん』を創った!～高校生が語る図書館システム』に参加した。日々の業務に不可欠な図書館システム、しかも高校生が製作してプログラミングコンテスト最優秀賞を受賞した作品とあって関心も高く、会場からも熱気が感じられた。

まず、システム開発者である生徒さんたちの指導教員の久保先生から、学校とプログラミングコンテストの概要、システムが完成するまでの過程をお話いただいた。

図書館システムをテーマに据えたものの当初は利用者側の視点しかなく、業務のイメージをつかむために学校図書館の業務マニュアルを参考にしたほか司書の先生に聞き取りをして必要な機能をリストアップし、プログラミングとインターフェース製作を期日ぎりぎりまで続けたという。

専門学校生や大学生・社会人も出品するコンテストで最優秀賞に選ばれた技術の高さと、生徒さんたちが自分たちで問題を解決していく様子が伝わってきた。

次いで、システムを開発した生徒さんから実際のシステムの画面を示しながら各機能を紹介していただいた。会場の環境で見る限り蔵書検索などのレスポンスも非常に早く、目が疲れないようにと配色まで工夫された画面は親しみやすく見受けられた。

利用者側からは蔵書検索、個人ページで予約や貸出情報の確認、購入希望や意見の投稿まで行える。とくに最近一部の蔵書検索システムで試みられている、図書のレビューを投稿する機能を備えているほか、分野ごとに選択した新刊情報がメルマガとして届くなど、例えばインターネットショッピングサイトでは当たり前となっていることを自然な着想で取り込んでいる。

図書館からのイベント告知、お勧め図書や貸出ランキングなど図書館からの情報発信も同じシステム上で可能で、利用者と図書館との一方通行でないやりとりがこれまたごく自然に実現していることが新鮮であった。

業務用の画面の紹介でも貸出返却から予約・督促、新しい図書の登録、利用者情報の管理、蔵書点検まで、必要な業務を実現している。

開発者がとくに力を入れた点として、督促や予約図書の返却を知らせるメールの送信機能が挙げられていた。我々の普段使っているシステムにはすでにある機能である。しかし、紙の督促状を担任を通じて本人に渡していた業務を効率化するために実現したという出発点は、ただ業務を置き換えるだけでなくよりよい方法をシステムで提供しようという意気込みを表しているように思われた。

最後の質疑応答は時間が足りなくなるほど活発に行われた。ただ、発表者と質問者との図書館の業務形態や立場が異なり、互いの基本的な事情を理解するために時間をとられてしまった。完成度の高いシステムであるがゆえに、発表者が図書館職員でも図書館システムの専門家でもないことを忘れて質問してしまい、発表者を戸惑わせてしまったのではないかと危惧する。

全体を通しての感想として、一つは、システムを開発する基本的な過程を垣間見せていただけたということである。

どうしても大学図書館のシステムと比較してしまうが、蔵書検索が学内のみの公開であることや、それに関連して NACSIS-CAT など外部データベースとの連携機能がないこと、もともと業務として想定のない ILL など、同様には考えられない点ももちろん多い。

それは逆に言えば、この『猫の司書さん』が開発された学校図書館において過不足のない、現場に即したシステムを開発した結果であろう。

業務を分析し、それを実現あるいは省力化するためのシステムを製作し、不具合があれば修正する。まったくシステム開発に暗い私にも自然に納得できるプロセスであり、そうしてオーダーメイドのシステムを作れることをうらやましく思った。

いま一つ、惜しむらくはこのシステムを現実に使う予定がないということである。やはり、使ってみなくてはシステムの良さも改善点も見えてこない。ぜひ実際に運用して、よりよいシステムに発展させていただきたい。

冒頭の久保先生のお話にあった、「よいソフトウェアとは、技術的に優れているものではなく、使う人にとって使いやすいソフトウェアである」という言葉が印象に残った。いつか、今回の生徒さんたちのような未来の技術者の作るオーダーメイドのシステムを使うことができれば、と想像する将来が楽しみである。

やまもと なみ (京都大学医学図書館)

参加報告③ 湖城 強 「猫の司書さん」とは何なんだろう

高校生が作った優秀な図書館システムらしいけれども、図書館システムは図書館システム、わざわざ見に行く必要が有るのかという気持ちがある反面、図書館システムでこれほどの評判は最近聞いたことがないので、行けば何かあるかもしれないという気持ちもあって、申込期限ぎりぎりまで迷った挙げ句、結局、参加することにしました。

いつもの4支部例会とは違って、遠隔地からの参加者が多数で驚きました。例会が始まる前から今回は大成功だというのが会場を見渡してよくわかりました。

このシステムを作った生徒さん達は、この春ご卒業とのこと、生徒さん達が集まって講演する機会はこの例会以降、まずないと思われまます。貴重な機会に参加できたのは幸運でした。

前半1時間は、指導された先生が開発の背景などを、生徒さん達が「猫の司書さん」の様々な機能についてプレゼンテーションされました。後半1時間は、参加者との質疑応答でした。

先生のプレゼンテーションは、背景としての学校の方針、教育、U-20 コンテスト、資格取得等についてでした。生徒さん達のプレゼンテーションは、「猫の司書さん」の機能について、また、生徒さん達が考えた工夫等についてでした。生徒さん達のプレゼンテーションはとても上手で、図書館システムの業者のプレゼンテーションのようでした。質疑応答まで、業者のプレゼンテーションのような様相でした。

主な質問は、どんな機能があるのかということに集中していたように思います。支払関係、雑誌関係、MARC 取込みなどがなかったことがわかりました。

それらのサブシステム(古い言い方ですね。)がない図書館システムなんて、信じられない、失望したと思った人もいたでしょうし、それらの開発されていないサブシステムが完備されたらもう業者のシステムに追いつくと感じた人もいたと思います。

わたしは、それらは「猫の司書さん」の姿ではないような気がします。わたしが重要だと思った点は2点あります。

最初に、「猫の司書さん」はU-20 コンテスト用のソフトであって、商用ソフトではないということです。商用ソフトは、バージョンアップする事を考えて作られています、コンテスト用の作品は出品した時点がすべてです。バージョンアップのためのドキュメントや取扱説明書等の書類はないと思います。

ソフトをリリースしておしまい。極端に言えば、競技用の消耗品と考えたほうが良いでしょう。本来はトロフィーで終わるはずの「猫の司書さん」があまりにもよくできていたので、なんとか現場で使えないだろうかと思うのは自然なことです。それで、「猫の司書さん」をオープン化したりやフリーウェア化することを望む声もあると思います。ただ、仮にそうなったとしても、誰が面倒を見るのかという大問題が残ります。

次は、高校の図書室の業務をターゲットとして開発されたということです。生徒さん達は高校の司書さんにインタビューして仕様を作成したわけです。当然、高校図書室、もっと言えば東濃実業高校図書室のニーズにあったシステム開発です。

質問にあった、支払関係のサブシステムがないことも、雑誌関係のサブシステムがないことも、MARC 取込みサブシステムがないことも、必要性が低いから開発されなかったか、開発する事を思いつかなかったのかだと思います。

私自身の小規模研究所の図書室勤務の経験から考えると、上述のことに納得がいきます。研究所では、資料の支払は、普通の備品消耗品と同じように事務で支払っていました。また、受入冊数も驚くほど少ないので、MARC も不要で、Webcat をコピーペーストすれば間に合いました。雑誌も200 タイトル程度は有ったように思いますが、購入タイトル数が少なければマニュアル処理で十分でした。

逆に、生徒さん達が力を入れた部分に高校図書室のニーズがあり、工夫した部分に生徒さん達の思いがあると思います。

生徒さん達が力を入れた部分は、貸出、返却、督促と閲覧関係の機能と蔵書点検という蔵書管理機能です。また、メールの利用で、図書室と生徒一人一人のコミュニケーションを確保して、人間の司書さんの負担になっている部分を改善することを意図していると思います。

私が注目した機能は、ホームページでのイベント紹介機能やメールによるお知らせ機能です。学校図書館では、「図書館便り」が業務の中で大きなウェイトを占めているようで、ホームページを活用して「図書館便り」作成・配布の負担を軽くし、加えてメールでも図書室と利用者を結びつけようという気持ちがよく反映されていると思います。

20年前には今のように入り口から出口まで揃ったシステムばかりではなかったのですが、この20年間のコンピュータ等の進歩を考えても、あの短期間で生徒さん達は業務をよくまとめたと思います。必要にして十分な性能を備えていると思いました。

私にとって、なぜあんなに分かりにくかったのか考えてみました。「猫の司書さん」を、自分の知っている図書館へ引きつけて考えていたように思います。自分の勤めている図書館だったらと無意識に考えていたように思えます。

引きつけるのではなく、見る対象に合わせる必要があるのだということを教えられたような気がします。図書館という言葉は同じでも、具体的な図書館すべて違うことが大事ではないかと思いました。

ハードウェア、ソフトウェアが進歩し、自由度が上がったとはいえ、開発の最初のステップである企画、業務分析、設計は20年前とあまり変わらないと思います。生徒さん達が、1週間程度で企画書を作成し、そのあと司書さんにインタビューをしながらシステムを数ヶ月で完成させたのは、驚くべき事です。

20年前の図書館システムでは、機器の能力不足もありましたが、「猫の司書さん」より不便なシステムはいっぱいありました。でも、マニュアルより遥かに便利で良いという事で使っていたのです。その後、様々な機器、環境などの進歩があって今の図書館システムがあるのです。

それを考えると、大学より遥かに小規模な高校の図書室の現在の環境下では必要十分な機能があると私は思います。

最後に、なぜ「猫の司書さん」があれほど私に見えにくかったのかという反省があります。思うにそれは、自分の中にある大学図書館、もっといえば今、勤めている図書館が知らない間に物差しになって、「猫の司書さん」を見たからではないかと考えています。

個々の図書館を自分の良く知っている図書館から見る事は誤りのもとの、同じ部分と違う部分を区別し意識して見る事が重要なんだと思った例会でした。

こじょう つよし (大阪市立大学学術情報総合センター)

参加報告④ 田辺 浩介

私は「Project Next-L」(*1)という図書館管理システムの自主開発プロジェクトに参加し、そのプロトタイプとなるシステムの開発を進めている。開発を進めるにあたり、国内外の図書館管理システムの動向を日々注視しており、それによって「このアイデアはおもしろい」という新機能の発想を得ることもあれば、時には「このプロジェクトはここまでできているんだ、こっちも負けなぞ」と奮起することもある。その中でも、今回岐阜県立東濃実業高校の生徒たちが開発した「猫の司書さん」のニュース、それに今回の大図研合同例会でのプレゼンテーションは、いろいろな意味において最も衝撃を受けたもののひとつであった。システムの概要については、すでにニュース記事(*2)やブログ(*3)などで紹介や説明がなされているので、この稿では今回のプレゼンテーションに関して、私の感想を述べることにしたい。もっとも、感想は端的に言えば、次の一語に尽きる。

「くっ、悔しい!!」。

なにに対してそう思ったか。

まずは、「猫の司書さん」のシステム自体に対する気持ちである。学年管理などの事務作業の機能もさることながら、何よりもそのユーザインターフェースやメール配信によるSDIなどの「使いたい」と思わせる魅力で、今のプロトタイプは完全に負けている。むしろ、質疑応答で突っ込まれたMARC未対応などの弱点はあるものの、学校図書館で使う分にはじゅうぶんだらう。これを超えるものを作れずして、なにが新しいシステムなのか、しかもまだ業務に使える形にすらなっていないではないか。その状況が悔しい(「高校生相手にムキになるな」と思われる方がいらっしやるかもしれませんが、比較の対象はあくまでシステムそのものであって、相手が高校生かどうかというのは全く関係ありません。むしろ子ども扱いするほうが失礼)。

次に「世の中では今の図書館や図書館管理システムは、こんなこともできないと思われているのか?」という点である。これは主に、「猫の司書さん」が応募した経済産業省「第28回U-20プログラミング・コンテスト」の審査員のコメントをニュース記事で読んだり、当日の質疑応答で聞いたりして思ったことである。実際にはその程度はできるシステムは多いのだが、それは「審査員の勉強不足」ではなく、「本当はできる」ということが世の中に認知されていないという、別の問題を浮き上がらせていると受け止めるべきであらう。その状況が悔しい。

最後に、「図書館の人間は、これをどういう目で見ているのか? どういう思いでこのシステムを見に来たのか?」という点についてである。参加者は学校図書館の方も多く、おそらく「このシステムを自分の図書館に入れてみたい」と思っている方もいらっしやったことだらう。では、大学図書館の方はどうだろう? システム化が早くから進み、また業務も複雑になっているため、大学で現在の「猫の司書さん」を使うのは難しいだろうから、「すぐ使いたい」と思っている人はいないだろう。では、なぜここまで大学図書館の人間が注目することになるのか? 現在の図書館管理システムに対して、なんとなく不満を持っているのはわかるのだけど、それ以上のことがよくわからない。「なにがどうなっているから使いにくい」という言葉が聞こえない。なにより、「こうだったらいいな」という他力本願な言葉は聞こえるのに、「だから自分はこうしたい」という言葉が聞こえない。その状況が悔しい。

「高校生がここまで作るなんてすごい」、これは（前述のとおり、「高校生が」というところを除けば）現実に対する素直な感想だろう。「日本ではシステム・ライブラリアンの育成や採用の体制が整っていないから、私たちが主体的にシステム開発を進めることは難しい」、これも日本の図書館の世界で何度か聞く言葉であり、おそらく現実もそれに近いものだろう。しかし、私たちにできることは「すごい」「難しい」と思うだけなのか？「自分たちは、閉塞的なその状況を変える力を持っているのか」と聞かれて、「はい」と胸を張って答えられるか？早合点してほしくないが、「変える力」＝「プログラムを書く能力」ではない。もっと大事なものは「業務効率やサービスの改善のために、自分はこうしたい」という意思を持ち、論文や仕様書などのドキュメントとして、はっきりとほかの人たちに示すべきではないか。もし今のシステムが使いにくいのであれば、それはユーザである私たちが、そのような意思を伝えることをしてこなかったツケなのだ。ほんとうに私たちは、意思を伝えるために表現する努力をしてきたか？（もっとも、プログラムを書くことは、その意思を最も直截的に表現し、実現することのできる手法のひとつである。なにより、図書館の蔵書や建物を拡張することは、物理的な制限があつて容易ではないが、プログラムを書くには、そのような制限は「自分にはできない」というあきらめの気持ち以外にはなにもないのだから）。

今回話してくれた高校生たちは、「大人」であり「プロ」である図書館員の指摘に「悔しい、作り直したい」とはっきりと答え、システムに対する真摯な姿勢と情熱を示してくれた。今度は私たちが、彼らの情熱に応える番だ。彼らは私たちを見て育つのだ。

私は日本の図書館員たちが、悔しさを胸に抱き、それを情熱に昇華させ、業務と研究に叩き付け、「これがプロの底力だ！」といえるだけの力を持っていると信じている。

図書館員たちよ、心の底から悔しがれ！

*1 "Project Next-L" <http://www.next-l.jp/> (accessed 2008-03-07)

*2 高橋信頼. "猫の司書さんはかわいい働き者" ---U-20 プログラミング・コンテスト, 最終審査結果発表". ITpro. 2007-09-18. <http://itpro.nikkeibp.co.jp/article/NEWS/20070918/282205/> (accessed 2008-03-07)

*3 図書館退屈男. "「猫の司書さん」に会ってきたよ!". 図書館退屈男. 2008-02-03. <http://toshokan.weblogs.jp/blog/2008/02/post-7091.html> (accessed 2008-03-07)

たなべ こうすけ (東京工科大学図書館)

◇ 会費納入のお願い ◇

会員みなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2007年度（大図研会計年度2007.07 - 2008.06）に入っておりますので、2007年度の会費の納入をお願い致します。また、2006年度以前の会費をお納めいただいていない会員みなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000（大図研会費：¥5,000＋京都支部会費：¥2,000）です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904 大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部 (dtkk@rg7.so-net.ne.jp)、または支部委員(組織・財政担当)の大綱浩一 まで。